

「平成 23 年の新潟・福島豪雨を経験して」

新潟県十日町市立十日町中学校 1年 ^{たがわ} ^{まち} 田川 榮智

私が小学校3年生の時の7月29日、その日は町内行事の打合せが夕方からあったので、地域の集会所に母と姉と行っていました。

夕方から雨がたくさん降ってきて、打合せが終わる頃には雷で停電し、傘をさしていても地面からの跳ね返りでビショビショになるような土砂降り状態で、家までは近いのですが父に迎えに来てもらうほどでした。

自宅と集会所の間には、「晒川」という川が流れています。十日町小学校に通学するには、町のほとんどの子がその川を渡って通学しています。川の幅は5m位なのですが、普段は水の流れは少なく、川の下はコンクリートになっていて、真ん中に1m程の側溝があり、いつも水はそこを流れています。

大雨の中、父の車で家に帰る時、晒川を渡りました。普段は水の量が少ない川でしたが、あちらこちらからの雨が集まって側溝から川に流れ込んでいて、濁った水が勢いよく流れていました。「こんな降り方が続いたら大変なことになるな。」という父の言葉がとても印象的でした。

家に帰って夕飯を食べ、テレビを見ている最中も雨が屋根を叩く音は一向に止まず、むしろ大きくなっていました。夕飯を終え、テレビを見ているとニュース速報も流れ、「新潟県でレーダー解析で100mmの雨量を記録」と言っていました。

しばらくすると、2階から母の声が聞こえてきました。「晒川の水があふれている！」父と一緒に急いで2階に向かいました。

晒川は私の家の裏の方を流れています。私の家は一段高い所であって、川を見下ろすような位置にあります。私が見た時には茶色く濁った水が川をあふれ出し、川沿いの道路を流れていました。川の脇には同級生の家もあり、大丈夫かなと心配になりました。

それを見た父は、山の工事関係の仕事をしていることもあり、急いで雨ガッパに着替え、川の方に向かいました。私たちは2階の窓から川を眺めていましたが、雨は少し小降りになったものの、あふれる水の量はどんどん増えていくようでした。今まで見た事のないような光景に、私は恐ろしさを感じました。

しばらくすると、父が走って家に帰って来て、私たちに「外に出てきなさい。」と言いました。母と私と姉たちは傘をさして川の方に向かいました。すると、普段通学路として渡っている『愛宕橋』には木の根や幹が引っかけ、流れてくる濁り水が大きく水しぶきを上げていました。勢いよく流れる水のすごい音と、土の匂いが今でも忘れられません。

あまりの状況に驚いている私に父が言いました。「いいか、しっかり目に焼きつけておけ。普段は大人しい川だが、大雨になるとこんな凄いことになるんだぞ！よく覚えておけ！」その言葉を聞いて私は怖くなってその場で泣き出してしまいました。

後で父から聞いたのですが、その時、十日町市のアメダスでは1時間に121mmの雨量を記録したそうで、その記録は新潟県の歴代1位の記録だそうです。父も子供の頃に川のふちギリギリまで水位が上がったのは見た事があるとの事でしたが、こんな風になるのは初めてだそうです。

121mmと聞いて、私は不思議になりました。たった12cmの雨が降っただけで、どうしてこんな大災害が起きるのだろうか。すると父は言いました。「雪ならば降れば、屋根だろうが道だろうが斜面だろうがそこに積もってとどまる。だが、雨はそうじゃない。水は低い所低い所へと流れ、川に集まる。たった10cmの水であっても何百倍、何千倍となって川に集まるんだ。」その話を聞いて、私は1時間に121mmの雨量というものがどんなものか分かった気がしました。

小学校で森林の働きを勉強した時、森林は降った雨を蓄える役割をする、と習いました。最近の大雨のニュースを見ると、道路に降った雨が側溝からあふれているような場面をよく見ます。アスファルトやコンクリートの面では降った雨がそのまま流れ、倍々となって下流へと流れます。ただ、森林は降った雨を一度に流すのではなく、ゆっくりと時間をかけて流す働きをし、おいしい湧水を作ります。どんな日照続きでも川の水が干上がらないのも森林のおかげだそうです。

災害で大きな被害を受けた『晒川』の工事もようやく終わりそうです。父の話の聞いてからニュースでの1時間〇mmという話に耳を傾けるようになりましたが、最近では1時間100mm超えというのをちよくちよく耳にし、その回数も増えていくように感じます。またいつ同じような豪雨が繰り返されるか分かりません。コンクリートで固めるのではなく、もっと森林を育て、降った雨がゆっくり川に流れ込むような町にしていかなければならないのではないかと私は思いました。